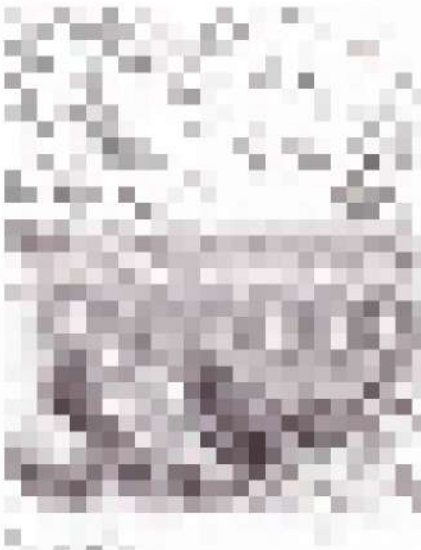


# Scramble Shot



## Opera ハンブルク州立歌劇場《ギョーム・テル (ウィリアム・テル)》

デルノン総裁とナガノ音楽総監督による新体制のハンブルク州立歌劇場は、ロッシーニ作曲《ギョーム・テル》に、ガブリエーレ・フェッロを迎えた。ハンブルク州立交響楽団との練習中は困難も多かったというが、この歌劇場にイタリア音楽の匂いを運んで来た。フレーズの頂点直前で音量、テンション共に下がる傾向や、アッチェレランドも効果的に使えていないなどは、未完成な信頼関係に起因しているのだろう。

ワルター候のアリン・アンカが急病のため、前日の《ルイザ・ミラー》公演でワルター伯爵を歌ったアレクサンダー・ヴィノグラドフが代役を務めたが、オリジナルキャストよりよかったという噂だ。特筆すべきは、連発する超高音との戦いが必要なため英雄のように歌われることが多いアルノール役を、韓国人テノールのヨゼップ・カンが自然に、それでも確実に歌いこなしたことだ。マティルデも中国人のゲンケン・ユだったため、アジア人カップルがスイス建国物語に登場するという違和感もないわけではないが、音楽的完成度の高さが観客を納得させていた。題名役のセルゲイ・ライフェルクスは合格点ギリギリといったところか。

プレミエAの3月6日直後はネガティブな批評ばかりが続々と集まり、劇場関係者をナーヴァスにさせていたが、所見したプレミエBの9日直前あたりから肯定的な意見も聞かれるようになった。デルノン総裁が「若い頃の自分を思い出さ

せる」と評価しているスイス人演出家ロジェ・フロントベルの演出が争点なのだが、テルを英雄としてではなく画家に仕立てた劇中劇という演出には不可解な部分が多過ぎ、「愛国心は時として外国人排斥に繋がる」という、現在のスイスの一政党を揶揄しているというコンセプトは、ロッシーニ最後のオペラの深く、劇的な音楽と相容れず、独りよがりな傾向は否めない。しかし、ドイツが誇るシラーが原作を書いたとはいえ、スイスの国民的伝説にドイツ人観客が少なからずスタンディングオベーションを贈る光景は普段の生活ではあまり見られない微笑ましいもので、芸術の力を再認識させた。

(中東生)

